

外国語教育における学習基準の分析 —「文学教材」に焦点をあてて—

リッチングス・ヴィッキー・アン
関西学院大学大学院

要 旨

本研究の目的は、文学教材の JFL 教育における位置付けを把握し、その使用の可能性を検討することである。本目的の達成に向けて、3 つの学習スタンダード (JF スタンダード、CEFR、ナショナル・スタンダード) における教材としての「文学」の位置付けに焦点をあて、それぞれの基準において「文学」の学習目標は何かを考察し、日本語教育における文学教材の意義について考える。調査の結果、1) 教材としての「文学」に関する学習基準が存在し、2) 「文学的テキスト」を読み、様々なスキルを身につけることができるという学習目標が示され、3) 文学教材が各スタンダードにおいて教材の一つとして認められており、使う価値が十分にあるということが明らかになった。しかしその一方で具体的な教授法や応用例が提供されているわけではなく、文学教材をさらに普及させるためにもこれらの課題に取り組む必要がある。

1. はじめに

外国語としての英語教育 (English as a Foreign Language、以下 EFL と表記) の世界では文学教材が積極的に活用され、その是非についても多くの研究がなされており、文学的テキストを外国語の学習にどのようにいかせるかについて様々な提案がされている (Hall 2005, Lazar 1993, Maley 2001, Vandrick 2003)。その一方で、外国語としての日本語教育 (Japanese as a Foreign Language、以下 JFL と表記) では、外国人留学生を対象とした日本語の授業における読む活動の多くが論説文を対象としたものであり、日本語の読解ストラテジーや教授法に関する研究は進んでいるものの、文学教

材の使用の是非についてはほとんど議論されていない（池田 2005, 伊藤 1991, 菊池 1996, 南久園 1997）。つまり、外国人留学生を対象とした日本語の授業における文学教材の扱いは非常に限られている（Richings 2012）。

上述した点を受け、本研究の目的は、文学教材の JFL 教育における位置付けを把握し、その使用の可能性を検討することである。本目的の達成に向けて、本稿では、言語教育とその教授と評価に関するガイドラインの役割を果たす 3 つの学習スタンダードにおける教材としての「文学」(literature) の位置付けに焦点をあて、それぞれの基準における教材としての「文学」はどのように取り上げられているのか、学習目標は何かを考察する。現在応用されている学習基準を調査することによって、外国語教育における教材としての文学がどのように捉えられているのかを考察することができ、JFL における文学教材の可能性を考える上で重要な糸口となるのではないかと考える。

調査対象のスタンダードは、次の 3 つである。1) 国際交流基金 (Japan Foundation) が開発した JF スタンダード、2) ヨーロッパの欧州言語共通参照枠 CEFR、3) アメリカの全米外国語教師協会 (ACTFL) におけるナショナル・スタンダーズ (National Standards、以下 NS と表記)。この 3 つのスタンダードを取り上げる理由は、各スタンダードの開発背景や理念、外国語教育の位置付けが細かいところで異なっている⁽¹⁾ものの、どのスタンダードも学習者の言語熟達度を表す客観的基準であり、外国語教育の促進を目指す目的で開発された教育枠組みであることで知られているからである。

本稿では、まずそれぞれのスタンダードにおける学習標識である「学習目標」「学習基準」「学習到達指標」を紹介した上で、各スタンダードにおける「文学教材」の位置付けを分析し、日本語教育における文学教材の可能性について考える。

2. 3つのスタンダードの概要

CEFR は、「ヨーロッパの言語教育のシラバス、カリキュラムのガイドライン、試験、教科書、等々の向上のために一般的基盤を与えること」(Council of Europe 2008: 1) を目的とし 2001 年に発表された共通参照枠である。「言語学習者が言語をコミュニケーションのために使用するためには何を学ぶ必要があるか、効果的に行動できるようになるためには、どんな知識と技能を身につければよいかを総合的に記述するもの」であり (Council of Europe 2008: 1)、ヨーロッパの多言語主義、および「複言語主義」を根幹としている。

JF スタンダードとは、国際交流基金が日本語の国際化と国際理解の促進を目指し、「相互理解のための日本語」という理念のもと 2005 年より開発してきた日本語教育の様々な基盤整備を担うツールである。JF スタンダードは、CEFR を基礎に作られ、CEFR の理念と目的を意識しながら、日本語の学習、教授、評価のための共通参照枠を目指す。目指す規準を日本語の「コミュニケーション言語能力」と「コミュニケーション言語活動」の二つの要素に分け、その統合を志すものである (国際交流基金 2010a)。

最後に、NS はアメリカの 21 世紀における外国語教育の方向を示すべく開発された教育内容の枠組みである。1993 年全米外国語教師協会 (ACTFL) と他の 4 つのヨーロッパ系外国語教師会が、21 世紀を迎えるための教育上の準備として、合同で連邦政府教育省の支援を受け、ナショナル・スタンダードズ実行委員会を発足、その 6 年後の 1999 年に言語別スタンダードズを含む『外国語学習スタンダードズ』を発行した。NS の理念として、「言葉とコミュニケーションは人間生活の基本であり、多民族国家であるアメリカは、国の内外において子ども達が多文化・多言語の社会環境に適応し、貢献できるよう教育しなければならない。(中略)」とうたい、「世界の言語」を学ぶことを重要視している (聖田 1999a: ii)。

この 3 つのスタンダードでは、外国語・日本語教育の「学習目標」「学習

基準」「学習到達指標」の3項目が示されており、学習により何ができるようになることが望ましいかが明示されている。以下それぞれの項目を紹介し、最後に各スタンダードにおける「文学教材」の位置付けを分析する。

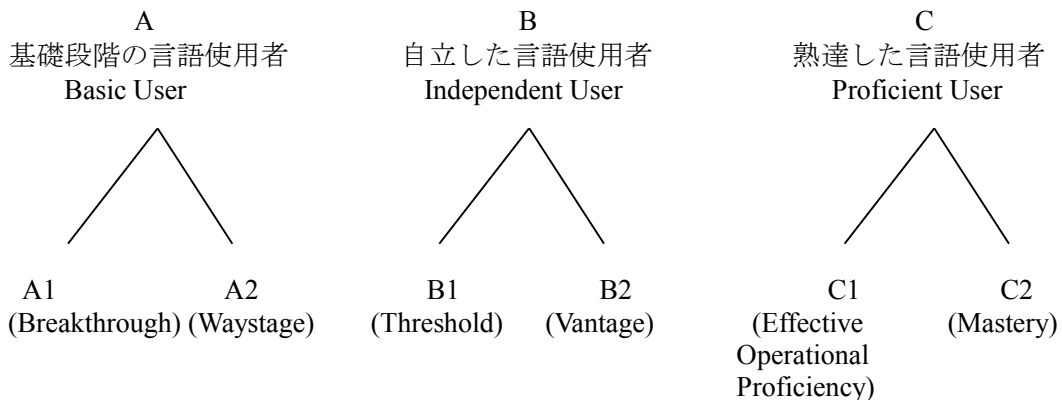
3. 3つのスタンダードの学習目標

3.1 CEFR と JF スタンダードにおける学習目標

上述のように、JF スタンダードは CEFR を基礎に作られた枠組みであり、JF スタンダードの学習目標は、基本的に CEFR における6つの共通参照レベルと同じである（国際交流基金 2010a: 11）。そのため、以下では、両者をまとめて説明することとする。

CEFR の言語熟達度の共通参照レベル（common reference levels）は、「学習者の熟達度の定義によって、それぞれの達成レベルで何が期待できるかを、より具体的に述べることが可能になる。このことは総合的学習目標を明確に、かつ現実的な形にする際に役に立つ」（Council of Europe 2008: 16）としている。図1は CEFR における6つの共通参照レベルを示したものである。

図1 CEFR における6つの共通参照レベル（Council of Europe 2008: 23）⁽²⁾



JF スタンダードの学習目標は、上述したように CEFR を基礎に作られた枠組みであり、基本的に CEFR における6つの共通参照レベルと同じであ

る（国際交流基金 2010a: 11）。

3.2 NSにおける学習目標

NSにおける学習目標は、「5つのC（Communication: その言語でコミュニケーションを行う、Cultures: 他の文化への知識と理解を深める、Connections: 言語を通して他の分野とつながりを持ち、情報を得る、Comparisons: 比較を通して言語・文化への洞察力を養う、Communities: 言語習得の継続と多言語社会への参加）から構成されています。これらの目標領域を支えるのに全部で11項目にわたる指導規準（standards）があり、学習ストラテジーやテクノロジー分野の研究成果も組み込まれています」（聖田1999a: ii）とされている。

4. 3つのスタンダードの学習基準

4.1 CEFR と JF スタンダードの学習基準

JF スタンダードは CEFR の学習基準を基に作られていることから、JF スタンダードにおける「コミュニケーション言語能力」と「コミュニケーション言語活動」の2つの学習基準は CEFR の構成に準じている^③。本稿では、JF スタンダードの木^④による「コミュニケーション言語能力」と「コミュニケーション言語活動」（国際交流基金 2010a: 8）を取り上げ、その内容を表1と2で明示する。

表1 JF スタンダードの木による「コミュニケーション言語能力」

I. コミュニケーション言語能力 (communicative language competences)	
1.言語構造的能力 (linguistic competence)	語彙、文法、発音、文字、表記など
2.社会言語能力 (sociolinguistic competence)	相手との関係や場面に応じて適切に言語を使う
3.語用能力 (pragmatic competence)	言葉を組み立てたり、役割や目的を理解する

表2 JFスタンダードの木による「コミュニケーション言語活動」

II. コミュニケーション言語活動 (communicative language activities)		
1. 産出 (productive activities) (話したり書いたりする)	2. 受容 (receptive activities) (読んだり聞いたりする)	3. やりとり (interactive activities) (会話などを行う)
話すこと全般	聞くこと全般	口頭でのやりとり全般
経験や物語を語る	母語話者同士の会話を聞く	母語話者とのやりとりをする
論述する	講演やプレゼンテーションを聞く	社会的なやりとりをする
公共アナウンスをする	指示やアナウンスを聞く	インフォーマルな場面でやりとりをする
講演やプレゼンテーションをする	音声メディアを聞く	フォーマルな場面で議論する
書くこと全般	テレビや映画を見る	共同作業中にやりとりをする
作文を書く	読むこと全般	店や公共機関でやりとりをする
レポートや記事を書く	手紙やメールを読む	情報交換する
	必要な情報を探し出す	インタビューする／受ける
	情報や要点を読み取る	文章でのやりとり全般
	説明を読む	手紙やメールのやりとりをする
		申請書類や伝言を書く

表2からわかるように、言語活動は、「産出」「受容」「やり取り」の3つに分類されている。JFスタンダードの木には、さらにその3項目をつなぐ役割を果たす「テキスト」とそれぞれの活動と能力をつなぐ「方略」が示されている。

4.2 NSの学習基準

学習者が習得すべき学習基準 (standards) は11項目ある。NSは、全外国語に共通する部分と言語別、10か国の外国語のスタンダードから構成されている。言語別の中に日本語スタンダードがあり、幼稚園から大学まで

を対象に開発されている。ここでは、日本語学習スタンダードにおける学習基準を取り上げる（表3参照）。

表3 日本語学習スタンダードにおける学習基準（聖田 1999b: 1）

目標	内容（規準）
1. コミュニケーション	日本語でコミュニケーションを行う
	スタンダード 1.1: 対話を通して他の人と情報のやりとり、感情の表出、意見の交換をする。 スタンダード1.2: 様々な話題について、日本語で書かれたものや話し言葉を理解し、解釈する。 スタンダード1.3: 様々な話題について、自分の考え、意見、及び情報を口頭で、あるいは書いて発表する。
2. 文化	日本文化を理解し、知識を習得する
	スタンダード2.1: 日本人の習慣・慣習（practices）を学び、その背景（perspectives）について理解する。 スタンダード2.2: 日本文化における文化的所産・産物（products）とその背景（perspectives）について理解する。
3. コネクション	他の教科内容に関連づけ、情報を得る
	スタンダード3.1: 日本語を用いて他の教科分野の知識を習得・補強する。 スタンダード3.2: 日本語及び日本文化を通して情報を得、特有な視点を認識する。
4. 比較	日本語と母語の比較により言語と文化への洞察力を養う
	スタンダード4.1: 日本語と母語を比較し、言語に関する理解を深める。 スタンダード4.2: 日本文化と自己の文化を比較し、文化の概念を把握する。
5. コミュニティ	国内及び国外において多文化・多言語社会に参加する
	スタンダード5.1: 学んだ日本語を学校内外で使用する。 スタンダード5.2: 人生を豊かにするために、日本語を使用し、生涯教育の一環として学習の継続を心がける。

5. 3つのスタンダードの学習到達指標

4.1 で述べた学習基準と同じように、JF スタンダードと CEFR における学習到達指標も基本的に同じである。両者において学習の熟達度を表すために、「Can-do」、すなわち「～できる」という statement が用いられている。JF スタンダードの場合、「Can-do」を活用することによって、日本語の熟達

度を客観的に把握したり、今後の学習の目標を明確にしたりすること」ができるとされている（国際交流基金 2010a: 11）。JF スタandardにおいて は 342 の Can-do 項目が存在するのに対し、CEFR は 493 の Can-do 項目を提示している⁽⁵⁾。

一方、NS における学習到達指標に関しては、習得すべき学習基準（standards）とその目標に合うように指導するための到達指標サンプル（sample progress indicators）が示されている。しかし、JF Standardや CEFR と違い、到達指標サンプルはそれ自体Standardではなく、「学習者があるレベルに達すると遂行できる事柄であり、内容としては他の様々な事柄が指標となり得る。到達指標のサンプルはあくまでサンプルであって、他にも様々な指導方法が考えられる」（聖田 1999a: 22）とされている。外国語としての日本語の場合、200 の到達指標が示されている。目標領域における学習到達指標は 4 年生（小 4）、8 年生（中 2）、12 年生（高 3）、16 年生（大 4）に分けられ、教師はそれぞれの学年指標を自分のプログラムの立場に応用できる仕組みになっている。

以上、3 つのStandardにおける学習基準の内容をまとめたものを表 4 に示す。

表 4 3 つのStandardにおける学習基準

内容	JF Standard (日本語)	CEFR (外国語一般)	NS (日本語)
学習目標	6 つの共通参照レベル	6 つの共通参照レベル	5 つの目標領域
学習規準	コミュニケーション言語能力 コミュニケーション言語活動	コミュニケーション言語能力 コミュニケーション言語活動	11 のStandard
到達指標	342 の Can-do 項目	493 の Can-do 項目	200 のサンプル
特徴	言語の 4 技能 習得レベル	言語の 4 技能 習得レベル	言語と関わる 5 つの領域 言語の背景にある文化

6. 3つのスタンダードにおける「文学教材」の位置付け

6.1 分析方法

前節において、外国語教育の学習基準となる3つのスタンダードの概要を概観した。本節では1節で述べた目的に従い、言語教育の教授と評価に関するガイドラインの役割を果たす各学習スタンダードにおける教材としての「文学」の位置付けに焦点をあて、教材としての「文学」はどのように取り上げられているのか、学習目標は何かを考察する。そのための分析方法として以下の3つの方法を使用する。1) JF スタンダードと CEFR の Can-do 項目 (国際交流基金 2010b) と NS の日本語学習到達指標項目 (聖田 1999b) から「文学的テキスト」(narrative) を含意する言葉⁶⁾を抽出、2) 3つのスタンダードにおける文学的テキストの出現頻度を比較、3) 「文学的テキスト」を含意する語句の学習意義や到達目標を検証するために、それぞれのスタンダードにおける記述内容の調査を行う。

6.2 分析結果と考察

上記1)の分析方法について、「文学的テキスト」を含意する言葉の一例として、CEFR の Can-do 項目の内容を以下の表5に示す。続いて、2)の分析の結果が、表6に示した、3つのスタンダードにおける文学的テキストの出現頻度である。表6の数値は「文学的テキスト」を含意するそれぞれの言葉が何回検出されたかを指し、()内の数値は当該スタンダードにおける項目番号や参考箇所を指す。分析3)の結果をまとめたものが表7であり、出現語句の学習意義や到達目標のそれぞれのスタンダードにおける記述内容の概略である。

表5 CEFR の Can-do 項目内容の一例 (国際交流基金 2010b)

CEFR Can-do 一覧 レベルごと						
No.	種類	言語活動	カテゴリ	レベル	CEFR Can-do (日本語)	CEFR Can-do (English)
11	活動	産出	レポートや記事を書く	C2	明瞭で流れるような、複雑なレポート、記事、エッセイを書き、事例を説明したり、提案や <u>文学作品</u> の批評文を書くことができる。	Can produce clear, smoothly flowing, complex reports, articles or essays which present a case, or give critical appreciation of proposals or <u>literary</u> works.

分析した結果、JF スタンダードには4つ、CEFR には6つ、NS には34の「文学的テキスト」を含意する項目が検出された(表6参照)。総合的に教材としての「文学」の出現頻度から、以下の2点が指摘できる。

1) 3つのスタンダードは、どれもが学習リソースとして文学的テキストを取り上げているが、テキストジャンルや出現頻度においては違いがみられる。たとえば、CEFR において「劇」という単語が2回使われていたのに対し、JF スタンダードには「劇」という単語は使われていなかった。「文学」という単語に関しても同じである。一方、JF スタンダードにおいて「短編」、「小説」、「昔話」という単語があるのに対し、CEFR にはそういった単語は使われていなかった。文学的テキストを含意する言葉とその出現頻度を調べた結果、JF スタンダードがCEFR を基に作られているとは言え、文学的テキストを含意する言葉の有無に関しては、数やテキストジャンルが異なることがわかる。

2) 「文学的テキスト」を含意する項目は、NS が一番多く記述が詳細である。NS は、CEFR と JF スタンダードに比べ、様々なジャンルのテキストを取り上げており、出現頻度も他の2つのスタンダードに比べて高い。例えば、NS は小説、児童文学や詩などあらゆる教材を豊富に取り上げている。また、「文学」、「劇」、「詩・俳句」などという単語の出現頻度は非常に

高い。つまり NS においては、文学的テキストをテキストジャンルごとに分けるのではなく、「文学」のように一つの項目にまとめる傾向が見られる。また、CEFR と JF スタandard に比べ、「劇」、「詩・俳句」などという単語の出現頻度が高いことは興味深い。

表 6 3つのStandardにおける文学的テキストを含意する言葉と出現頻度

語	JF Standard	CEFR (JF Standardのま とめによる)	NS (日本語)
文学	0	2 (3, 11)	10 (1.1,1.2,1.3,2.2,4.2)
物語	0	1 (180)	5 (1.2,1.3,2.1,2.2,3.1,3.2)
短編	1 (14)	0	0
小説	1 (107)	0	2 (2.2,4.2)
昔話	1 (37)	0	1 (1.3)
随筆	0	0	1 (2.2)
詩・俳句	1 (220)	1 (266)	7 (1.3,2.2,3.1,3.2)
劇	0	2 (58,104)	8 (1.3,2.1,5.1,5.2)
合計	4	6	34 ⁽⁷⁾

次に各Standardにおける文学教材の学習目標を比較し分析した結果を表 7 に示す。分析結果から以下の 3 点が明らかとなった。

1) 文学的テキストを用いて具体的なスキルや習得目標が 3 つのStandardに示されているが、到達目標の内容は異なる。たとえば、JF Standardの場合、文学的テキストを使って「作文を書く」、CEFR は「レポートや記事を書く」、NS では「様々な話題について日本語で書かれたものや話し言葉を理解し、解釈する」ことが学習目標として設定され、各Standardにおける学習者のレベルが異なっていることがわかる。

2) NS においては、文学的テキストを含意するそれらの項目が学齢に応じて様々な形で指導サンプルとして提示されている。このことから、NS が JF Standard と CEFR とでは異なる特徴を持っていることがわかる ⁽⁸⁾。

3) 3 つのStandardにおける「文学的テキスト」を用いた学習基準は、JF Standard と CEFR の場合、言語の 4 技能と結び付けられているのに

対し、NS は具体的な技能よりも目標領域の一つを指し、言語の背景にある「文化」概念が特に強調されていることが見て取れる⁹⁾。表 7 を見ると、JF スタンドアードは、文学教材をもって「読む」「書く」「話す」という 3 つの技能の向上を学習目標としており、CEFR は「読む」「書く」「聞く」能力の習得を学習目標にしている。つまり、両スタンドアードは文学教材に関しては「読む」「書く」技能を中心に捉えている点は共通しているが、「話す」「聞く」技能についてはどちらか一方しか採用していない。すなわち、JF スタンドアードと CEFR は文学教材の使用において、言語の 4 技能と結びついた具体的な熟達度が示されているのに対し、NS では 4 技能に特化せず、より広範な言語活動及び言語能力が想定されている。

最後に、JFL 教育における教材としての日本文学の可能性を検討するにあたって、3 つのスタンドアードにおける学習リソースとしての「文学」の位置付けを次の 4 点に要約することができる。

1) 日本語教育においては文学教材の使用の是非についてほとんど議論されていないという現状に反し、僅かであるものの、文学的テキストを教材として用いる学習基準が JF スタンドアードにおいて実際に存在する。

2) 3 つのいずれのスタンドアードにおいても、文学的テキストを教材として用いることで、「読む」「書く」「聞く」「話す」などといった具体的なスキルや、「情報や要点を読み取る能力を身につける」「テレビや映画を見る」「日本文化と自己の文化を比較し、文化の概念を把握する」などといった能力の習得ができると想定されている。

3) 同様に、いずれのスタンドアードでも、文学的テキストは「読む」ことだけでなく、「書く」「聞く」「話す」技能を合わせて、4 技能を身につけるための学習リソースの一つとして捉えられている。

4) CEFR および特に NS のスタンドアードでは、文学的テキストは 4 技能以外にも「社会言語能力」、とりわけ言語の背景にある「文化」を意識させるための学習道具の一つであるとされているが、JF スタンドアードの場合は

そういった要素が含まれていない。

表7 出現語句の学習意義や到達目標（国際交流基金 2010b, 聖田 1999b）

JF スタンダードにおける「文学的テキスト」を用いた学習基準	CEFR における「文学的テキスト」を用いた学習基準	ナショナル・スタンダードにおける「文学的テキスト」を用いた学習基準
情報や要点を読み取る能力を身につける（読む）（B2）	読むこと全般（読む）（C2）	話題を通して他の人と情報のやりとり、感情の表出、意見を交換する（話す ⁽¹⁰⁾ ）（大学生）
作文を書く（書く）（A2, B2）	レポートや記事を書く（書く）（C2）	様々な話題について日本語で書かれたものや話し言葉を理解し、解釈する（読む・聞く）（4, 12, 16 年生）
論述する（話す）（B1）	テレビや映画を見る（聞く）（B2）	様々な話題について、自分の考え、意見及び情報などを口頭で、あるいは書いて発表する。（話す・書く）（全学年）
	作文を書く（書く）（B2.1, A2.1）	日本人の習慣・慣習とその背景との関係について理解する。（総合的技能・社会言語能力）（4 年生）
	聞くこと全般（聞く）（B1.1）	日本文化における文化的所産・産物（products）とその背景について理解する。（総合的技能・社会言語能力）（全学年）
		日本語及び日本文化を通して情報を得、その特有な視点を認識する。（総合的技能・社会言語能力）（4 年生）
		日本文化と自己の文化を比較し、文化の概念を把握する。（総合的技能・社会言語能力）（4, 12 年生）
		学んだ日本語を学校内外で使用する。（総合的技能・社会言語能力）（12 年生）
		人生を豊かにするために、日本語を使用し、生涯教育の一環として学習の継続を心がける。（総合的技能・社会言語能力）（16 年生）

表6と7からわかるように、JF スタンダードにおいては、文学教材が4技能を身につけるための学習リソースの一つとして捉えられていることが

わかるものの、4つの「文学的テキスト」を含意する項目、「短編」「小説」「昔話」「詩・俳句」しか検出されず、CEFR や NS と異なり、「社会言語能力」、特に言語の背景にある「文化」を意識させる学習基準や到達指標が見当たらない。換言すれば、教材としての「文学」に関する記述は、日本語の学習基準を最も直接的に反映するはずの JF スタandard が、3つのStandardの中で一番乏しいと言わざるを得ない。JF Standardにおける文学教材の扱いが最も少ない上に、文化的要素が見いだせない点が明らかになった。

7. 結論

本稿では、JFL 教育における教材としての日本文学の可能性を問うことを目的に、言語教育の教授と評価のガイドラインである学習Standardにおける「文学」の位置付けに焦点をあて、各Standardにおいて「文学」はどのように取り上げられているのか、学習目標は何かを考察した。外国語教育における学習基準を示す3つのStandardのいずれにおいても、文学教材を用いて特定のスキルや能力を獲得するという目標を設定し、その意義が明確にされている。本調査のテーマである日本語教育における文学教材の可能性という観点では、1) 教材としての「文学」に関する学習基準が存在し、2) 「文学的テキスト」を読み、様々なスキルを身につけることができるという学習目標が示され、3) 文学教材が各Standardにおいて教材の一つとして認められており、使う価値が十分にあるということが示されている。しかし、具体的な教授法や応用例が提供されているわけではない。さらに、実際のところ、日本語教育の現場で学習Standardの学習基準に沿って日本文学がどのように使用されているかということろまでは検証されていないため、学習Standardが提示する文学教材の学習効用は不明である。また、そもそもなぜ JF Standard や JFL 教育において文学教材が重視されていないのかということまではわからない。上述

の点に加え、CEFR と NS における文学教材の扱いを比較すると、JF スタンダードにおける文学教材の扱いが極めて少ない上に、文化的要素が見いだせない点がとても興味深い。JF スタンダードは、CEFR の理念と目的を基に作られたにもかかわらず、今回のように「文学教材」という一つの要素に焦点を当てて分析すると、両者の違いがよくわかる。今回得られた知見を日本語教育実践においてどのように反映させるかが、上述した課題の取り組みに大きくかかっている。よって、文学教材をさらに普及させるためにも、学習リソースとしての文学の意義をより明確にし、JF スタンダードや JFL 教育において文学教材が重視されない理由を検証した上で、具体的な適用例を提供する必要がある。これらの課題も踏まえて今後の研究につなげたい。

注

1. JF スタンダードが、外国語としての「日本語」のみを対象にしているのに対し、CEFR は多言語主義のもとで様々な不特定の言語を、一方で NS は様々な特定の言語を対象とする中に「日本語」が含まれているという相違点を考慮すべきである。本稿では、この相違点を念頭におきながら各スタンダードにおける「文学教材」にあたる内容を中心に詳細な調査を行う。
2. CEFR の場合、A2, B1, B2 のレベルがさらに細かく A.2.1, A.2.2, B1.1, B1.2, B.2.1, B.2.2 に分けられており、これらの細分化の利点は、「それぞれの地域の必要性に応じて、(中略) 当該地域の利用者の異なった観点に基づいて実際のレベルに分けていくことが可能な点にある」(Council of Europe 2008: 32)。
3. CEFR の「仲介活動」(mediation) に値する 4 つ目の活動が JF スタンダードにはない。また、「仲介活動」という活動は翻訳や通訳を指す活動である。
4. JF スタンダードの開発にあたっては、言語によるコミュニケーションを言語能力と言語活動の関係でとらえ、「JF スタンダードの木」とする一本の木で表現している。
5. JF スタンダードにおける 342 の Can-do 項目と CEFR の 493 の Can-do 項目の違いは、前者は C1, C2 レベルの項目を示していないこと、plus-levels を表示していないこと、および「方略」や「テキスト」、「言語構造的な能力」に値する「能力」の項目を Can-do に加えていないことである。
6. 「文学」または「文学的テキスト」については古今東西様々な議論がなされてきたものの、これといった決定的な定義が存在しない。本調査においては、文学や文学的テキストとは何かについての抽象的な定義を行うことはせず、「文学」に関連のあるテキスト、および「文学的テキスト」であると思われる語句「文学」「物語」「短編」「小説」「昔話」「随筆」「詩・俳句」「劇」など

- を検出対象とする。
7. JF スタンダードと CEFR の数値は項目ごとの数値である。一方 NS のサンプルに関しては、「文学的テキスト」は一つの項目として取り上げられている場合と、複数の語が一つの項目の例として表示されている場合がある。分析の段階で、一つの（文学的テキスト）ジャンルとして取り上げられている項目をすべて加算したが、それぞれの項目の実際の数値は記した数値よりも高い。
 8. 上述したように、JF スタンダードや CEFR と違って、到達指標サンプルは「それ自体スタンダードではなく、学習者があるレベルに達すると遂行できる事柄であり、内容としては他の様々な事柄が指標となり得る」（聖田 1999a）。
 9. CEFR の場合、「文化」概念が強調されていないわけではない。Can-do 項目には明記されていないが、「言語体験は、その文化的背景の中で広がる。（中略）言語や文化を完全に切り離し、心の中の別々の部屋にしまっておくわけではない」（Council of Europe 2008: 4）、「複言語主義はそれ自体としては複文化主義（pluriculturalism）のコンテキストの中で見る必要がある」（Council of Europe 2008: 5）という記述からわかるように、文化という要素は CEFR の中心ともなっていると言える。
 10. NS における「文学的テキスト」を用いた学習基準の欄で記している（技能）は著者の判断によるものである。

参考文献

- 池田庸子（2005）「日本語教育における文学教材—国語教育における文学教材論を参考に—」『茨城大学留学生センター紀要』第3号, 25-34.
- 伊藤博子（1991）「読解能力の養成 学習ストラテジーを利用した指導例」『世界の日本語教育』第1号, 145-160.
- 菊池民子（1996）「日本語の読解におけるテキスト構造の影響と読解前指導の効果」『日本語教育』95号, 25-36.
- 国際交流基金（2010a）『JF 日本語教育スタンダード 2010』「第二版」
http://jfstandard.jp/pdf/jfs2010_all.pdf（2013.5.25 閲覧）
- 国際交流基金（2010b）
http://jfstandard.jp/pdf/CEFR_Cando_Level_list.pdf
http://jfstandard.jp/pdf/JF_Cando_Level_list.pdf（2013.7.6 閲覧）
- 聖田京子（1999a）『21世紀の外国語学習スタンダード：外国語学習スタンダード』翻訳版、国際交流基金日本語国際センター。

- 聖田京子 (1999b) 『21世紀の外国語学習スタンダードズ：日本語学習スタンダードズ』 翻訳版、国際交流基金日本語国際センター。
- 南久園博美 (1997) 「読解ストラテジーの使用と読解力との関係に関する研究調査—外国語としての日本語テキスト読解の場合—」『世界の日本語教育』 第7号, 31-44.
- Council of Europe (2008) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 初版第2刷 吉島茂、大橋理枝 (訳、編) 朝日出版社。
- Richings, Vicky Ann (2012) 「日本語教育における文学教材の可能性」『言語コミュニケーション文化』 Vol.10, No1, 関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会, 91-105.
- Hall, Geoff. (2005). *Literature in language education*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Lazar, Gillian. (1993). *Literature and Language Teaching: A Guide for Teachers and Trainers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Maley, Alan. (2001). Literature in the language classroom. In R. Carter & D. Nunan (eds.), *The Cambridge Guide to Teaching English to Speakers of Other Languages*, 180-185. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vandrick, Stephanie. (2003). Literature in the teaching of second language composition. In B. Kroll (ed.), *Exploring the dynamics of second language writing*, 263-283. Cambridge: Cambridge University Press.